様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　４月　５日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：若手研究（B）
研究期間：２００８～２０１１
課題番号：２０７２００５９
研究課題名（和文）新聞・雑誌メディアにおけるジェンダー編成と小説
——大正・昭和の言語態分析
研究課題名（英文）Textual Analyses of the Arrangement of Gender in Print Media and Novels of the Taisho and Showa Eras
研究代表者
内藤　千珠子（NAITO CHIZUKO）
大妻女子大学・文学部・准教授
研究者番号：２０４３３７０８

研究成果の概要（和文）： ジェンダーの観点から確認できる大正・昭和期の言説論理の特徴について、新聞・雑誌メディアと小説を言語態分析することにより、考察を行った。メディアにおける植民地主義の論理が小説に引用される際、ジェンダーをめぐる表現をつうじて、逆転の力学が作動すること、そのことにより、国民国家が正当化されることを明らかにした。また、韓国の研究者との交流により、帝国と植民地の非対称性と検閲のシステムをかかわらせ、ジェンダー論的に検証するという成果が得られた。

研究成果の概要（英文）： This research considers the feature of texts in print media and novels in Taisho and Showa Eras. The analyses and consideration was performed from a viewpoint of gender. When the novels quote the logic of the colonialism that media express, movement of an inversion occurs by representation of gender. Therefore, a nation-state is justified. Moreover, the exchange activities with a South Korean researchers were useful. The asymmetry of an empire and colony, and the system of inspection could be verified from a viewpoint of gender.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	500，000	150，000	650，000
２００９年度	500，000	150，000	650，000
２０１０年度	500，000	150，000	650，000
２０１１年度	500，000	150，000	650，000
総　計	2000，000	600，000	2600，000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：　文学・日本文学
キーワード：　近･現代文学、ジェンダー、メディア

１．研究開始当初の背景

人文系の諸研究領域では、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究など、あるいはそれらの理論を踏まえた国内外の研究の流れを受け、従来の手法を超える形で、

脱領域的な方法論が要請されていた。そもそも、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル研究自体が、脱領域的なスタンスをもった方法論であり、方法論的古典として国内外で参照されることの多い、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』(白石隆・白石さや訳、リブロポート、１９８７年［原著 1985］)や、エドワード・サイード『文化と帝国主義１・２』(大橋洋一訳、みすず書房、１９９８・２００１年［原著 1993］) なども、広域的な視点から対象を分析している。したがって、国内の研究もそうした流れを受けていたといえるだろう。

以下、研究開始時の具体的状況について、2 点にまとめて示す。

（1）言語態分析、表象研究、日本近代文学研究について

山中桂一・石田英敬らを編集委員とする『シリーズ言語態』(全６巻、東京大学出版会、２０００～２００２年)、小林康夫・松浦寿輝編『表象のディスクール』(全６巻、東京大学出版会、２０００年）などが編まれたことが示すように、言語態分析、表象分析といったアプローチ法によって、言語資料を広域的に検討するという動向が広く見受けられた。

また、近代日本文学研究の領野では、明治３０年代研究会を中心に、脱領域的な研究スタイルが定着しつつあった。同研究会は、紅野謙介・小森陽一・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー』(小沢書店、１９９７年)、金子明雄・高橋修・吉田司雄編『ディスクールの帝国』(新曜社、２０００年）など、文学的な言語を関連する諸言語と比較対照し、言語資料を脱領域的に考察した論文集を出版した。

さらに、中山昭彦・島村輝・飯田祐子・高橋修・吉田司雄を編集同人とする『文学年報』（世織書房、２００３年～）が、文学研究を出発点とし、文化の諸領域を問題にする論考集として創刊されていた。

（2）歴史研究、メディア研究について

歴史研究の領域では、ひろたまさき、キャロル・グラッグ監修の『歴史の描き方』(全３巻、東京大学出版会、２００６年）において、日本とアメリカの日本研究者による学際的・越境的な共同作業が行なわれ、成田龍一『歴史学のスタイル』(校倉書房、２００１年）や小熊英二『単一民族神話の起源』(新曜社、１９９５年)、『〈日本人〉の境界』(同前、１９９８年）などの領域横断的な研究が存在していた。

メディアや表象の研究では、文化的な表象に注目した広域的な視点から言説分析が行なわれたり、朴裕河『ナショナル・アイデンティティとジェンダー』(クレイン、２００７年）にみられるように、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル研究に交差させる形で、ジェンダーやセクシュアリティをめぐる理論が展開されていた。

また、東アジア地域における研究交流を通して、帝国と植民地の非対称性を総括的に考えるための視座が模索されていた。

本研究課題は、（1）（2）のような広域的研究を目指そうとする９０年代以降の研究状況からその着想を得た。上記（1）にかんしては、『シリーズ言語態』に執筆者として一部関わり、また、明治３０年代研究会にも所属して活動していた。そうした方法論をもとに、単著『帝国と暗殺―ジェンダーからみる近代日本のメディア編成』(新曜社、2005 年）をまとめ、明治期のメディアと文学の関係についてジェンダー論の視点を取り入れ、明らかにしたところであったので、さらに、その延長で、明治期の構造が大正期にどのように変容したのかについて検討しようというモチベーションをもっていた。

このような背景から、広域的な観点をもって言説資料を分析する方法論をとって、大正・昭和期を具体的な考察時期として展開しようと考えた。

２．研究の目的

新聞・雑誌メディアにおけるジェンダー編成と小説言語の関係に焦点を当て、大正・昭和期の言説構造を分析・考察しようとするのが、本研究の目的であった。

近代日本が国民国家として成立し、定着してゆく過程で生じた言説の論理について、言語態分析の方法論をとって検討することを試みた。それにより、脱領域的なスタンスから、メディアの言語や文学的言語が複数の言語領域で構成された論理とどのように関わるのかを明らかにするとともに、ジェンダー編成をめぐる活字メディアと小説との相関関係を考察することを目指した。

明治期の国民国家が生み出した論理が、その後新聞・雑誌メディアや小説においていかに引用され、変化しながら定着したのかを検討するために、１９１０年代から１９３０年代を中心とする時期の日本語一次資料を収集し、新聞・雑誌メディアと小説において共有される構造と質的差異について、ジェンダーの問題系を中心として分析することが具体的な研究課題であった。なぜなら、メディアをめぐる研究もジェンダー研究も、それぞれ厚みを持った先行研究が蓄積されていたが、両者を重ね合わせた研究は多くなかった

からである。
なお、文学的言語と新聞・雑誌メディアの相関を検討するために、法的言語、学問的言語（人類学・民族学・民俗学・歴史学・教育学等）、衛生学・医学的言語、外交文書などを参照する必要があるため、それらの資料を収集し、さまざまな言語様態を比較・検証しながら、分析・考察を行なうことを目的として出発した。

３．研究の方法

本研究は、文学研究、歴史研究、メディア研究など、人文学系の研究分野で扱われてきた、近代日本をめぐる問題系に対して、言語態分析というアプローチ方法を用いて考察しようと試みたものである。言語態分析は、言葉のさまざまな実践様態を具体的な言語活動としてとらえ、総合的に理解した上で分析しようという方法論であり、文学研究とその他の人文学系研究分野との接点を作り、これまでの研究を総合して脱領域的に研究することを可能にするという学術的な特色を持っている。
また、そのような方法論を用いた研究の方向性と、ジェンダー論的、フェミニズム的な観点をかけあわせることによって、はじめて浮上する問題系を学術的に可視化していこうとした。
本研究では、こうした方法論的な特徴をいかし、近代の日本語資料を丹念に収集し、言語態分析を行うことによって、それぞれの言語ジャンルの特色を考慮しながら、あらゆる言語態に属する文字資料を、限定せずに広く対象として分析することとした。
具体的には、大妻女子大学図書館、国立国会図書館、国文学研究資料館、近代日本法政史料センターや、国内外の研究施設・図書館を利用し、１９１０年代から１９３０年代の一次資料の収集と分析にあたった。とくに、植民地期の韓国における資料の調査についても、現地に赴いて適宜行なった。
収集した新聞・雑誌の一次資料は、集めた記事のタイトルをテーマごとに整理し、デジタルカメラでデータ化した資料とリンクできるよう、データの作り方を工夫することとした。
また、アメリカやヨーロッパの東アジア研究者、韓国の研究者とも連携し、研究会や座談会、ワークショップなどに参加することを通して、継続的に共同作業と議論とを行った。

４．研究成果

大正・昭和期の言説論理の特徴について、１９１０年代から１９３０年代に焦点をあわせ、新聞・雑誌メディアと小説の言語態を分析することにより、ジェンダーの観点から考察を行った。日本語文学研究におけるジェンダー論的な方法論に関して、新たな展望を得ることができた。
研究の過程で得られた成果を、4 点にまとめて示す。

（１）大正・昭和期言説の見取り図
研究の目的である、大正・昭和期言説の特徴について、収集した資料の分析・考察により、大まかな見取り図を得ることができた。

①小説における引用の力学
メディアにおける植民地主義の論理が小説に引用される際、ジェンダーをめぐる表現をつうじて、逆転の力学が作動することを、谷崎潤一郎や林芙美子の小説などを一例にして検証した。
小説の場合、同時代のメディアの論理や物語を紋切り型として引用するのではなく、ジェンダー表象において逆転の運動を織り込むことが多い。植民地主義の論理はより奥行きを得ることとなり、その結果、帝国主義的な国民国家の存在が正当化されることになる。

②ジェンダー表象をめぐる問題構成
小説テクストにおいて構造化された語りや視点、描写と、小説内記号としての登場人物との相関を、メディアにおいて構成されたジェンダー構造と比較しつつ分析した。それにより、この時期のジェンダー表象をめぐる問題構成が明らかとなった。
具体的には、女性登場人物にジェンダーをめぐる両義性が付されたり、男性登場人物が女性ジェンダーの比喩で表現されたりすることで、ジェンダーをめぐる攪乱が生じるありようを考察した。その混乱が近代天皇制を背景とした既存の論理を強化する場合と、批判的に再構築する場合のあることを実証した。この点に関しては、社会文学会における学会発表で「物語の殺意――天皇制が織りなすジェンダー表象」(2010 年 6 月 19 日）と題して報告することができた。

（２）帝国と植民地をめぐる非対称性
韓国や北米、ヨーロッパの研究者との交流により、帝国と植民地の非対称性について、ジェンダー論的に検証するための新しい視座が得られた。北米やヨーロッパ、アジアの研究者が参加して行われた小林多喜二記念シンポジウム（英国オックスフォード大、２００８年９月１７日）や、マギル大学東アジア研究センターにおけるシリーズ講演（カナダ・マギル大学、２００９年３月２３日）、あるいは韓国の若手研究者との研究会や座談会、ワークショップ等に参加することで、

現在の国際的な研究領域においても、植民地主義を考察する際に、ジェンダーの両義性を手がかりとすることが有効だと確認できた。

なお、とくに韓国の研究者からは帝国主義の構造を植民地の視点から考察することと、旧帝国の側から考察することの差異、あるいは相関的関係を構築する可能性について、有益な視座を得ることができた。

こうした作業の延長で、大正・昭和の特定の地点にみられる言説の特異性を抽出することができた。なお、韓国では、歴史批評社から『スキャンダルとしての暗殺』(『帝国と暗殺』新曜社、２００５年をもとにした韓国語版、高榮蘭ほか訳）を翻訳刊行することができた。

（３）現代小説や映画など、文芸的テクストとの関係

大正・昭和期のジェンダー構造をメディアと小説とを対照しながら検討していく過程で、現代小説や映画などに影響が及ぶ物語的な力学という論点が浮上した。ジェンダー構造の負の側面が、物語と結合して回帰する際の論理について、歴史を物語化して現在とかかわらせた文芸テクストを取り上げて明らかにした。

近代天皇制を背景としたジェンダー構造とセクシュアリティの相関について、スキャンダルという物語形式に注目して検討し、現代の天皇制をめぐるメディア報道が、近代のメディアの論理と性差別を下敷きにしたものであることを示した。

また、そうした考察の延長で、近代的な様式が内実を失いながらも効力を発揮する構造について、現代小説を分析することを通じて明らかにした。その内容は日本近代文学会で報告し（２０１１年１０月１５日)、日本近代文学と現代小説をめぐる批評を接続させる地点を可視化するという成果が得られた。

（４）検閲とジェンダー

とりわけ１９３０年代後半の文壇状況と検閲の関係性に注目し、検閲とジェンダーというテーマをもって資料調査を進めた。雑誌記事（主として『改造』や『中央公論』など）を調査し、メディアの言語と小説の言語を比較して検閲が言説空間に及ぼす効果を測定しつつ、伏字の表記がもつ意味について検証を行った。

この時期の移民とジェンダーの問題を具体的な主題として、女性作家の小説作品と雑誌の言説との差異と共通点を明らかにすることができ、韓国・成均館大学のワークショップ「近代検閲と東アジア」（２０１２年３月１７日）において、その一部を発表した。当時の女性作家たちが、物語の主軸からは隠された描写のレベルで、検閲システムを比喩的に暗示する回路を創出している点を示し得た。

日本語小説を扱った検閲研究において、従来は取り上げられにくかったジェンダー論的な観点を示したという点で、意義のある成果だといえるだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①内藤千珠子「廃墟への依存――現代小説が描く破壊された近代」『大妻国文』査読無し、４３号、２０１２年、２６５-２８２頁。
②内藤千珠子「ヒロインを降りる――『エロス＋虐殺』と物語の暴力」『大妻国文』査読無し、４１号、２０１０年、１１１-１２８頁。
③内藤千珠子「水に沈む錦魚――林芙美子『牡蠣』と負の移動」『文学』岩波書店、査読無し、第１１巻２号、２０１０年、１５５-１６９頁。
④内藤千珠子「混血するナオミの不潔な肌――『痴人の愛』の背理」『大妻国文』査読無し、４０号、２００９年、１３１-１４９頁。

〔学会発表〕（計３件）

①内藤千珠子「現代小説と偏り」日本近代文学会、2011 年 10 月 15 日、北海道大学。
②内藤千珠子「物語の殺意――天皇制が織りなすジェンダー表象」社会文学会、2010 年 6 月 19 日、フェリス女学院大学。

〔図書〕（計４件）

①十重田裕一、内藤千珠子ほか著、森話社、『横断する映画と文学』2011 年、執筆担当 345-370 頁。
②内藤千珠子、みすず書房『小説の恋愛感触』2010 年、総頁数 217 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者
内藤　千珠子（NAITO CHIZUKO）
大妻女子大学・文学部・准教授
研究者番号：２０４３３７０８

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし